



ぶらり らいぶらりい

～図書室にはこんな本があります～

No. 299

★利用者からの質問をもとに昭和館図書室の資料をご紹介します。
(書名の後の()の数字は請求記号です。)

(問) 戦前・戦中の日本サッカー界の様子がわかる資料はあるか。

(答) 「戦前・戦中についての記述がある近年の資料」と「当時の資料」を探してみましょう。

○近年の資料

まずはタイトル検索してみましょう。

図書 > **タイトルから探す** > **サッカー** > 7件ヒット

⇒『日本サッカー史 [本編]』(783/G72 開架一般 000049478)

近年の資料で、当時の概略を確認することができます。



○当時の資料

「出版年月」と「ことば」を組み合わせで検索します。

上記の資料も参考にして、検索キーワードを確認しましょう。当時と現在では広く使われていた言葉が違う場合があります。調べていく中で確認できる当時の呼称「蹴球」や大会名「極東大会」なども併せて検索すると、より多くの資料が確認できます。

図書 または **雑誌** > **出版年月から探す** > 昭和 20 年 8 月 以前

絞り込み検索 > **ことばで絞り込む** > **サッカー** **蹴球** 「いずれかのことばを含む」

を選択 > 288 件ヒット

⇒『アサヒ・スポーツ 第 17 巻第 2 号 = 第 434 号(昭和 14 年 1 月)』(780/A82/17-2 閉架引出 100007943) 新春ラグビー蹴球特輯号

その他ヒットした資料の目次情報に目を通してみると、戦前・戦中の日本ではオリンピックや極東大会、学生試合の記事が目立ちます。

出版年月から検索する場合、復刻版資料は復刻時の年月が出版年月として登録されるため、原資料の出版年月ではヒットしません。**ことばから探す**で、検索キーワードと「復刻版」を併せて検索しておく、漏れなく確認できます。

⇒『運動年鑑 第 17 巻(昭和 7 年)』(780/A82/17 地下書庫和図書 000047939)

ちなみに、当館に所蔵はありませんが『蹴球』(昭和 6 年(1931)創刊)という機関紙が発行されていました。該年代のものを読むと、当時の様子がわかるかもしれませんね。

図書室には、書棚に並んでいる図書以外にもたくさんあります。

検索端末を使って、読みたい本を探してみてください。

操作方法等、カウンター職員までお気軽にお問い合わせください。

命をつなぐ輸血の歴史

日本全国の鉄道をつなぐ大動脈として多くの人々が利用する東京駅は近年では外国人観光客も多く、様々な国籍や民族の人々が行きかう交通の拠点になっています。その東京駅の構内で、戦前期に二人の首相が命を狙われた事件がありました。一人は大正7年(1918)に首相となり、初の本格的政党内閣を結成した原敬です。10年(1921)に現在の丸の内南口付近で19歳の青年に刺殺されました。

もう一人は昭和4年(1929)に首相となった浜口雄幸です。翌年(1930)に憲兵に護衛されながら構内を移動中に狙撃されました。弾丸が命中した浜口はその場に崩折れ、顔色も蒼白となり重篤な状態となったことから駆けつけた医師は輸血を行うことを判断します。輸血をしたことにより「しばらくして首相の顔色は、赤味をおびて脈はくも次第に良好」となり、一命を取り留めました。この出来事が人々の関心呼び、国内で輸血が一般的に行われるようになるきっかけとなったと言われています。

昭和14年(1939)に出版された『血液の審判』では次のように記述されており、この頃には輸血に関する知識が市井の人々にも広まっていたことがうかがえます。

「外傷による出血、消化器の出血、内臓出血、出血性疾患、貧血、急性伝染病の虚脱状態、小児の栄養障碍などの際に、輸血によって効果をあげることが出来るのは、もう誰でも知っている。輸血する場合には、受血者と給血者の血液型をしらべて、適合したものを選ぶことが大切である。」

その後、太平洋戦争の激化に伴い、昭和18年(1943)に警防団や公務員、軍需工場の勤労者に対して血液型検査が開始されました。19年(1944)には一般家庭にも検査を広げるように東京府(当時)が町会や隣組に通牒しました。20年(1945)3月の府内の町会回覧板では「最近の時局下に鑑みましても益々血液型を知る事が必要」とされ、人々は空襲への備えとして防空頭巾や服の胸に血液型、住所、氏名、年齢などを書き込んだ認識票を縫い付けるように指導されました。

戦後の混乱期には輸血による医療事故が多発しました。昭和23年(1948)に東京大学病院で輸血による梅毒感染の医療事故が発生しました。翌24年(1949)12月12日の朝日新聞には「信用できぬ戦時の血液型」という見出しの記事が掲載されました。戦時中の検査でO型とされていた女兒が実際にはB型であったにもかかわらず、父親である医師がO型の輸血を行い、女兒が死亡する事故が起きたのです。同じような事故は各地で発生しており、当時の厚生次官が注意喚起をする事態となりました。相次ぐ事故を契機にGHQ(連合軍最高司令官総司令部)は国と東京都に対策をとるように指示します。

昭和26年(1951)に薬事法に基づき厚生大臣の登録を受けて保存血液を製造、供給する日本初の血液銀行(現赤十字血液センター)が発足しました。また、当時問題となっていた売血による供給を断ち切るため、昭和39年(1964)に「献血の推進について」の閣議決定が行われ、必要な保存血液はすべて献血によって確保することが打ち出されました。

現在では各地に献血ルームや移動献血車が整備され、安全な血液を安定的に供給できるようになりました。一方で少子化や新型コロナウイルス感染症の影響で集団献血の機会が少なくなり、献血へ協力する人数が減少しているそうです。輸血は他人事ではなく自分にも関わる事として考え、献血に参加するなど意識していきたいですね。

※引用箇所の旧仮名遣いを新仮名遣いに改め、旧漢字を新漢字に改めました。

【参考文献】

『新聞集成昭和史の証言 第4巻』(210.7/Sh59/4 開架一般 000036775)

『医療と戦時下の暮らし』(490/Sh64 開架一般 000068947)

『医制百年史』(498/Ko83/1 地下書庫和図書 000066068)

『血液の審判』(C491/Sh34 地下書庫中公新社 080001715)

『朝日新聞縮刷版 昭和24年 9～12月』(071/A82/1949-3 開架新聞縮刷版 000015028)



ぶらりらいぶらりい ～図書室にはこんな本があります～ NO. 299

2026年5月20日 発行/ 編集・発行 昭和館 図書室 〒102-0074 東京都千代田区九段南 1-6-1